

國學院大學學術情報リポジトリ

〔書評〕 内海紀子・小澤純・平浩一編『太宰治と戦争』

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山路, 敦史, Yamaji, Atsushi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000538

〔書評〕

内海紀子・小澤純・平浩一編

『太宰治と戦争』

山路敦史

小澤純「まえがき」——『戦争』に立ち会い続けた言葉」によ

れば、本書のタイトルにある「戦争」とは、「一九三一年（昭和六年）九月一八日の満州事変勃発、日中戦争に続く太平洋戦争、敗戦後の占領期」を指している。いわゆる第二次世界大戦や太平洋戦争といった名称が採られていないことについて、「この戦争が歴史的な固有名詞に未だなり切らず日常的な普通名詞でもあった、同時代を生きる作家の視点に寄り添う」ためと説明されるように、本書は太宰治のテキストを「戦争」という同時代の事象との切り結びにおいて把握した試みの集積である。各論の方向性を全体として統御する方法論は示されておらず、共通点を挙げるならば、実体的な太宰像を退け、テキストそのものの読解から「戦争」との接点や距離感を見極めようとする

姿勢となるだろう。だから、「戦争」への態度表明にかかわるテキストが分析されもすれば、「戦争」の影が薄いテキストも等しく検討の対象となる。安易な概括が難しい太宰のテキストが、多数の執筆者の切り口から読解されることで、「太宰治と戦争」の錯綜した複雑な関係性が浮き彫りにされている。テキストの曖昧さや両義性といったゆらぎを最大限に尊重しながら精読するという執筆者たちのバランス感覚に特に目を引かれた。本書は、共同研究と三部構成にしたがって配置された一一本の論文、二本のコラムからなる。

最初を飾る「太宰治スタディーズ」の会の「【共同研究】クロニクル・太宰治と戦争 1935-1945」では、「日中戦争開戦から太平洋戦争終結まで」の「戦局」「社会」「文学」というトピックと太宰とのかかわりとが四カ月ごとにまとめられている。時局や文学史的な事象、関連人物のエピソードなどがコンパクトに記述されていて、太宰のテキストを「戦争」という視座から捉えようとする際の端緒となるのはまちがいない。

第I部「『戦時下』の文学（者）」では、「戦争」が拡大していく時期の文学（者）が検討されている。滝口明祥「戦時下における〈信〉という問題系——太宰治と戦争」は、戦時下の態度表明にかかわる〈信〉を太宰の複数のテキストから検討して、

「信じる・信じられる」という関係性の問題と言葉が不要になる世界という超越性の問題とを示し、読者をテクストに巻き込む太宰の戦略を見出している。野口尚志「総力戦体制下の〈家庭の幸福〉——「花火」における青年の身体」は、「劣悪者」という表象を、人間を人材として確保する一方で、選別排除する総力戦体制下の矛盾が宿った記号として捉え、「劣悪者」の青年を殺すことで「幸福」を得た家庭が描かれた「花火」に、総力戦体制下の家庭像への過剰な適応としてのアイロニーを看取している。井原あや「戦時下の朗読文学——作家・メディア・投稿」は、朗読文学という場における様々な文脈を可視化し、教養人のための朗読文学が「夜鶴の声」の登場によって大衆向けに謙虚さを打ち出すものとなった点、読者投稿を募っていた『婦人画報』によって朗読文学にジェンダー規範が形成された点などを指摘している。五味渕典嗣のコラム「パロディの強度——「十二月八日」論のために」は、「一九四一年十二月八日」言説を定型と見なしてきた従来の理解に疑問を呈し、とりわけ、その言説がまだ定型とされていなかったタイミングで真っ先に創作主題として手をつけた太宰の「新郎」や「十二月八日」に定型に対する批評やパロディを読むことに警鐘を鳴らしている。

第Ⅱ部「『聖戦』と『敗戦』の時空」では、「戦争」末期のテ

クストが分析対象とされる。松本和也「『散華』における『小説』と『詩』」は、三田君と三井君の死を文学の完成とする点に時局への肯定を読み取りながら、玉碎としての死が抜き取られた上でなお成立する詩の純粋な美しさも併せて指摘し、「散華」を散文詩として読む視点を提示している。吉岡真緒「『津軽』論——言語空間『津軽』の反逆」は、「純血種の津軽人」を自称する「私」や津軽の換喩とされる弘前、「私」の旅が「既知の町」・未知の町」の区分によって巡礼化されている点などテクストのさまざまな論理を指摘し、中央の権力に対する服属と反逆とが複雑に織り込まれた言語空間としての『津軽』の構造を明らかにしている。斎藤理生「『瘤取り』論——「前書き」・『コブトリ』・『現代』を手がかりに」は、『お伽草紙』のなかの一篇「瘤取り」を「前書き」と典拠となった絵本『コブトリ』と比較することで明らかとなる人と人、あるいは人と鬼との関係に生じているズレが、かえって親和的な関係性を築ける可能性を論じつつ、「瘤取り」が掲載されるはずだった雑誌『現代』の方向性とのズレも指摘している。大國眞希「『竹青』——漢籍の世界と「私」の黄金風景」は、「竹青」を太宰が典拠とした『聊齋志異』と比較しつつ、末尾の女房が竹青へと変貌した理由を女房や魚谷の改心とする解釈を退け、魚谷が窓枠から固

有の風景を獲得したことによって、女房に元から備わっていた竹青的な美しさが顕現したことを論証している。若松伸哉のコラム「私の胸底の画像」を語る『惜別』——伝記小説の流行と太宰治作品」は、一九四二年頃から言及される伝記小説（論）が、対象人物の死を描写して意味づけ、それを描く作者の態度を重要視していたのに対し、『惜別』や『右大臣実朝』、『散華』といった太宰の伝記小説には、対象人物の死が直接描写されず、語り手が作中人物として登場する特異性があると述べる。

第三部「戦後」への架橋」では、戦中と戦後との連続／不連続性が検討される。内海紀子「この戦争の片隅に——『佳日』から戦争表象を考える」は、中心に対する周縁からの反抗として描かれていた「つつましき」が、総力戦体制下のテキスト「佳日」「作家の手帖」「雪の夜の話」においては、個を捨て全体へ奉仕する無私の表象へと変容し、戦後においては戦時下の無力さを示す記号として書き換えられたことを論じている。長原しのぶ「『バンドラの匣』論——戦争とキリスト教」は、『バンドラの匣』の物語の時間軸に加え、素材となった木村庄助の「病床日記」とそれを基に本来刊行されるはずだった『雲雀の声』に内包された時間にも目を配り、終戦という単一の時間軸に回収されないテキストの重層的な時間性とキリスト教の重要性を

明らかにしている。小澤純「日本一」を書くこと、書かないこと——『散華』・『お伽草紙』・『未帰還の友に』のテキスト連関」は、『お伽草紙』で「桃太郎」が書かれない理由について、「慰労」とは無縁な「日本の詩」であることと「日本一」を書くことに対する「私の責任」を回避することの二点を挙げ、「日本一の男」を描いた「散華」と「責任」の問題をめぐる「未帰還の友に」の検討に向かい、テキストを横断する「責任」の問題系を見出している。平浩一「戦後」の日付——志賀直哉「灰色の月」と『世界』、あるいは太宰治」は、『灰色の月』の同時代評価を類別しながら、末尾に書き加えられた日付によって生じ得る二つの解釈可能性、すなわちテキストを歴史や読者へと開いていく方向性と志賀個人の日付に閉じていく方向性とを示しながら、太宰が「如是我聞」で「灰色の月」を酷評したのは、自らが歴史的に普遍化されることへの拒否感から前者の解釈を否定するためだったと論じている。

本書は太宰を中心とした研究書だが、その成果は「戦争」と太宰のテキストとのさまざまな接点を浮き彫りにしているだけに留まるものではない。太宰とは一つの起（基）点であり、それぞれの議論によって文学と「戦争」との接点や距離感を見極める地点へと誘われる。太宰研究において重要な成果であるだ

けでなく、「戦争」という視座から文学テキストを論じようとする際にも示唆に富む一冊である。

(A5判、三五九頁、ひつじ書房、二〇一九年五月発行、定価五八〇〇円＋税)